

「万葉集を読む」大伴旅人と山上憶良

群馬県立女子大学教授 北川和秀

大伴旅人・山上憶良年表

西暦	年号	天皇	執政	事項	旅人	憶良
660	齊明6	齊明	中大兄	山上憶良、生まれる		1
661	7		皇子	(新羅に進発。齊明天皇没)		2
662	天智元					3
663	2			(白村江の戦い。百濟滅亡)		4
664	3					5
665	4			大伴旅人、生まれる	1	6
690	持統4			山上憶良？紀伊行幸時の歌	26	31
691	5	持統	高市		27	32
692	6		皇子		28	33
693	7				29	34
694	8			(藤原宮に遷都)	30	35
695	9				31	36
696	10		多治比		32	37
697	文武元		島		33	38
698	2	文武			34	39
699	3				35	40
700	4				36	41
701	大宝元			無位山上憶良、遣唐少録。(大宝律令制定)	37	42
702	2			(大宝律令を施行)	38	43
703	3				39	44
704	慶雲元		石上	山上憶良、この年帰朝か	40	45
705	2		麻呂	(大伴安麻呂、大納言。兼帥)	41	46
706	3				42	47
707	4				43	48
708	和銅元	元明		(柿本人麻呂、この頃没か)	44	49
709	2				45	50
710	3			(平城京に遷都)正五位上大伴旅人、左將軍	46	51
711	4		藤原	大伴旅人、従四位下叙位	47	52
712	5		不比等	(古事記撰進)	48	53
713	6				49	54

714	7		山上憶良、従五位下叙位〔正六位下から〕	50	55
715	靈龜元		大伴旅人、従四位上叙位。中務卿任官	51	56
716	2	元 正	山上憶良、伯耆守任官	52	57
717	養老元			53	58
718	2		大伴旅人、中納言任官	54	59
719	3		大伴旅人、正四位下叙位	55	60
720	4		大伴旅人、征隼人持節大將軍（日本書紀撰進）	56	61
721	5	長屋王	大伴旅人、従三位叙位。山上憶良、東宮侍講	57	62
722	6			58	63
723	7			59	64
724	神龜元		旅人、正三位叙位。憶良、長屋王の宅で七夕歌	60	65
725	2	聖 武		61	66
726	3		山上憶良、この年筑前守任官か	62	67
727	4			63	68
728	5		大伴旅人、大宰帥任官。旅人の妻病死	64	69
729	天平元	藤原武 智麻呂	(二月、長屋王自殺。八月、光明子立后)	65	70
730	2		大伴旅人の宅で梅花の宴。旅人大納言任官帰京	66	71
731	3		大伴旅人、従二位叙位。旅人没	67	72
732	4		山上憶良、この頃貧窮問答歌。この頃上京	73	
733	5		山上憶良没か	74	

【大伴旅人の歌】

- ①み吉野の 吉野の宮は 山からし 貴くあらし 川からし さやけくあらし 天地と 長く
 久しく よろづよ 万代に 変はらずあらむ 幸しの宮 (3・315)
- ②昔見し象の小川を今見ればいよよさやけくなりにけるかも (3・316)

大宰帥大伴卿の、凶間に報ふる歌一首
 罪故重疊し、凶間に累集す。永に崩心の悲しびを懷き、独り断腸の泣を流す。但し両君
 の大きな助に依りて、傾命を纔に継げらくのみ。筆の言を尽さぬは、古今、嘆く所なり。

- ③世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり (5・793)

④吾妹わぎ子もこが見し鞆の浦のむろの木は常世ともにあれど見し人そなき (3・446)

⑤磯の上に根這ふむろの木見し人をいづらと問はば語り告げむか (3・448)

⑥妹みねめと來し敏馬かへの崎を還るさに独りして見れば涙ぐましも (3・449)

⑦人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり (3・451)

⑧吾妹子むなが植ゑし梅の樹見るごとにこころ咽せつつ涙し流る (3・453)

⑨わが盛さかりまた変若をちめやもほとほとに寧樂ならの京みやこを見ずかなりなむ (3・331)

- ⑩我が命も常にあらぬか昔見し象の小川を行きて見むため（3・332）
 ⑪沫雪のほどろほどろに降り敷けば平城の京ならみやこし思ほゆるかも（8・1639）

- 大宰帥大伴卿、酒を讃むる歌十三首
- ⑫驗なき物を思はずは一壺の濁れる酒を飲むべくあるらし（3・338）
 〔⑬酒の名を聖と負せし古いにしへの大き聖の言ことのよろしさ（3・339）
 〔⑭古の七の賢しき人たちも欲りせしものは酒にしあるらし（3・340）
 ⑮賢しみと物いふよりは酒飲みて醉泣さまなきするしまさりてあるらし（3・341）
 〔⑯言はむ為便せむ為便知らず極きはまつたふとりて貴きものは酒にしあるらし（3・342）
 〔⑰なかなか人にあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染しみみなむ（3・343）
 ⑯あなた醜みにく賢しら賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似む（3・344）
 〔⑯価無き宝といふとも一壺の濁れる酒にあに益さめやも（3・345）
 〔⑰夜光る玉といふとも酒飲みて情こころをやるにあに若かめやも（3・346）
 ⑲世のなかの遊びの道にたのしきは醉泣さまなきするにあるべくあるらし（3・347）
 〔⑳今の世にし楽しくあらば来む生には虫に鳥にもわれはなりなむ（3・348）
 〔㉑生者いけるものつひにも死ぬるものにあれば今の世なる間は楽しくをあらな（3・349）
 ⑳黙然をりて賢しら賢しらするは酒飲みて醉泣さまなきするになほ若かずけり（3・350）

【山上憶良の歌】

紀伊国に幸しし時の川島皇子の御作歌 或は云ふ、山上臣憶良の作

- ①白波の浜松が枝の手向け草幾代までにか年の経ぬらむ 一に云ふ、年は経にけむ
 日本紀に曰はく、朱鳥四年庚寅の秋九月、天皇紀伊国に幸すといへり。（1・34）

山上臣憶良大唐にある時、本郷を憶ひて作る歌

- ②いざ子ども早く大和へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ（1・63）

日本挽歌一首（長歌一首・反歌五首あるうち、反歌二首）

- ③悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごと見せましものを（5・797）

- ④妹が見し棟あぶちの花は散りぬべしわが泣く涙いまだ干なくに（5・798）

神龜五年七月二十一日 筑前国守山上憶良 上る

子等を思ふ歌一首 序を并せたり

釈迦如來い、金口に正に説きたまはく、等しく衆生を思ふこと、羅睺羅の如しとのたまへり。又説きたまはく、愛は子に過ぎたりといふこと無しとのたまへり。至極の大聖すら尚し子を愛しぶる心あり。況むや世間の蒼うつく生よのなかの、誰かは子を愛しごとくさあをひとくさ。

- ⑤瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ 何処より 来りしものぞ 眼交に もとな懸りて 安眠し寝さぬ（5・802）

反歌

- ⑥銀しろかねも金くがねも玉まさも何せむに勝れる宝子に及かめやも（5・803）

山上憶良臣、宴を罷る歌一首

⑦憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそ（3・337）

⑧術も無く苦しくあれば出で走り去ななと思へど兒らに障りぬ（5・899）

敬みて熊凝の為に其の志を述ぶる歌に和ふる六首 序を并せたり（そのうちの二首）

筑前国守山上憶良

大伴君熊凝は、肥後国益城郡の人なり。年十八歳にして、天平三年六月十七日に、相撲つかひそれのくにのつかさともびとなみやこまゐむかてん使某國司官位姓名の従人と為り、京都に参向ふ。為天に幸あらず、路に在りて疾を獲、即ち安藝国佐伯郡の高庭の駅家にて身故りぬ。（以下略）

⑨家に在りて母がとり見ば慰むる心はあらまし死なば死ぬとも（5・889）

⑩出でて行きし日を数へつつ今日今日と吾を待たすらむ父母らはも（5・890）

⑪一世には二遍見えぬ父母を置きてや長く吾が別れなむ（5・891）

貧窮問答の歌一首 短歌を并せたり

⑫風雜へ 雨降る夜の 雨雜へ 雪降る夜は 術もなく 寒くしあれば 堅塩を 取りつづし
ろひ 糟湯酒 うち啜ろひて 咳かひ 鼻びしひしに しかとあらぬ 髮かき撫でて 我を
除きて 人は在らじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾 引き被り 布肩衣 有りのことご
と 服襲へども 寒き夜すらを 我よりも 貧しき人の 父母は 飢ゑ寒ゆらむ 妻子ども
は 吟び泣くらむ 此の時は 如何にしつつか 汝が世は渡る
天地は 広しといへど 吾が為は 狹くやなりぬる 日月は 明しといへど 吾が為は 照
りや給はぬ 人皆か 吾のみや然る わくらばに 人とはあるを 人並に 吾も作るを 織
も無き 布肩衣の 海松の如 わわけさがれる 襪襷のみ 肩にうち懸け 伏廬の 曲廬の
内に 直土に 藆解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に 囲み居て 褒へ
吟ひ 竈には 火氣ふき立てず 甌には 蜘蛛の巣懸きて 飯炊く 事も忘れて 鶴鳥の
呻吟ひ居るに いとのきて 短き物を 端截ると 云へるが如く 楚取る 里長が声は
寝屋戸まで 来立ち呼ばひぬ 斯くばかり 術なきものか 世間の道（5・892）
⑬世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば（5・893）

山上憶良頓首謹みて上る

山上臣憶良の、秋の野の花を詠む二首

⑭秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花 其の一（8・1537）

⑮萩の花尾花葛花瞿麦の花女郎花また藤袴朝貌の花 其の二（8・1538）

山上臣憶良の沈き痾の時の歌一首

⑯士 やも空しかるべき万代に語り続ぐべき名は立てずして（6・978）

右の一首は、山上憶良臣の沈き痾の時に、藤原朝臣八束、河辺朝臣東人をして疾める状を問はしむ。
ここに憶良臣、報の語已に畢り、須ありて涕拭ひ、悲しご嘆きて、この歌を口吟ふ。